新町小学校の発掘調査

－京都市上京区中立売通室町西入る三丁目 457番地－

1995年12月２日

財団法人　京都市埋蔵文化財研所

１．経過

この度、旧中立小学校敷地に新町小学校が新たに建設されることになりました。今回の発掘調査はその建設工事に先立って実施しているものです。この土地は、平安京左京北辺三坊に該当し、中世京都の町では「上京」の南端に位置する場所です。

調査は今年６月末から開始し、年末で終了する予定です。調査区は建設される校舎の形に沿って２か所に設定しました。東側を１区、西側を２区とよんでいます。

調査地周辺では、旧中立小学校の体育館建設工事に伴う発掘調査をはじめとして、数多くの調査を実施してきています。これまでの調査では、弥生時代の集落である内膳町遺跡、平安京の道路、鎌倉時代や室町時代の町屋、桃山時代の屋敷跡などを発見しました。今回の調査でも弥生時代から小学校の創立にいたるまでの様々な考古学的な資料が得られることが期待されました。

２．１区の調査

１区の調査では平安時代から江戸時代の遺構を確認しました。主な遺構には、江戸時代の井戸や石室、桃山時代の溝、室町時代の塀や土器溜めなどがあります。室町時代の塀は２か所で確認しました。いずれも南北方向に礎石をならべており、東側のものは同じ位置で何回も作り替えた痕跡を残していました。２基の土器溜めからは多量の土師器の皿をはじめとして、陶器の鉢や椀、小刀、鉄釘などが出土しています。また、各時代の柱穴を多数検出しましたが、一軒一軒の建物の復原にはいたってはいません。平安時代から鎌倉時代にかけての遺構は、わずかしか認めることができませんでした。なお、１区の調査は11月９日に終了しました。

３．２区の調査

２区は江戸時代の調査が終了し、現在、室町時代から桃山時代にかけての調査を進めているところです。今までに確認した主な遺構には、江戸時代の区画の溝、建物、地下蔵や土蔵、作業場や井戸、土器や瓦を投棄した穴、室町時代から桃山時代にかけての大規模な堀、土器や瓦を投棄した穴、柱穴などがあります。

江戸時代の遺構の分布をみると、調査区南側には井戸や柱穴、その北側に地下蔵や土蔵や作業場、さらにその北側を東西方向の溝が区画し、溝の北側には再び柱穴が集中していることが分かります。中立売通に面した大きな商家の跡を発掘したと考えています。土蔵のなかには地下室に施錠できる小さな石室を据え付けたもの、地下蔵のなかには壁に人頭大の石を積み上げた立派な造りのものもありました。

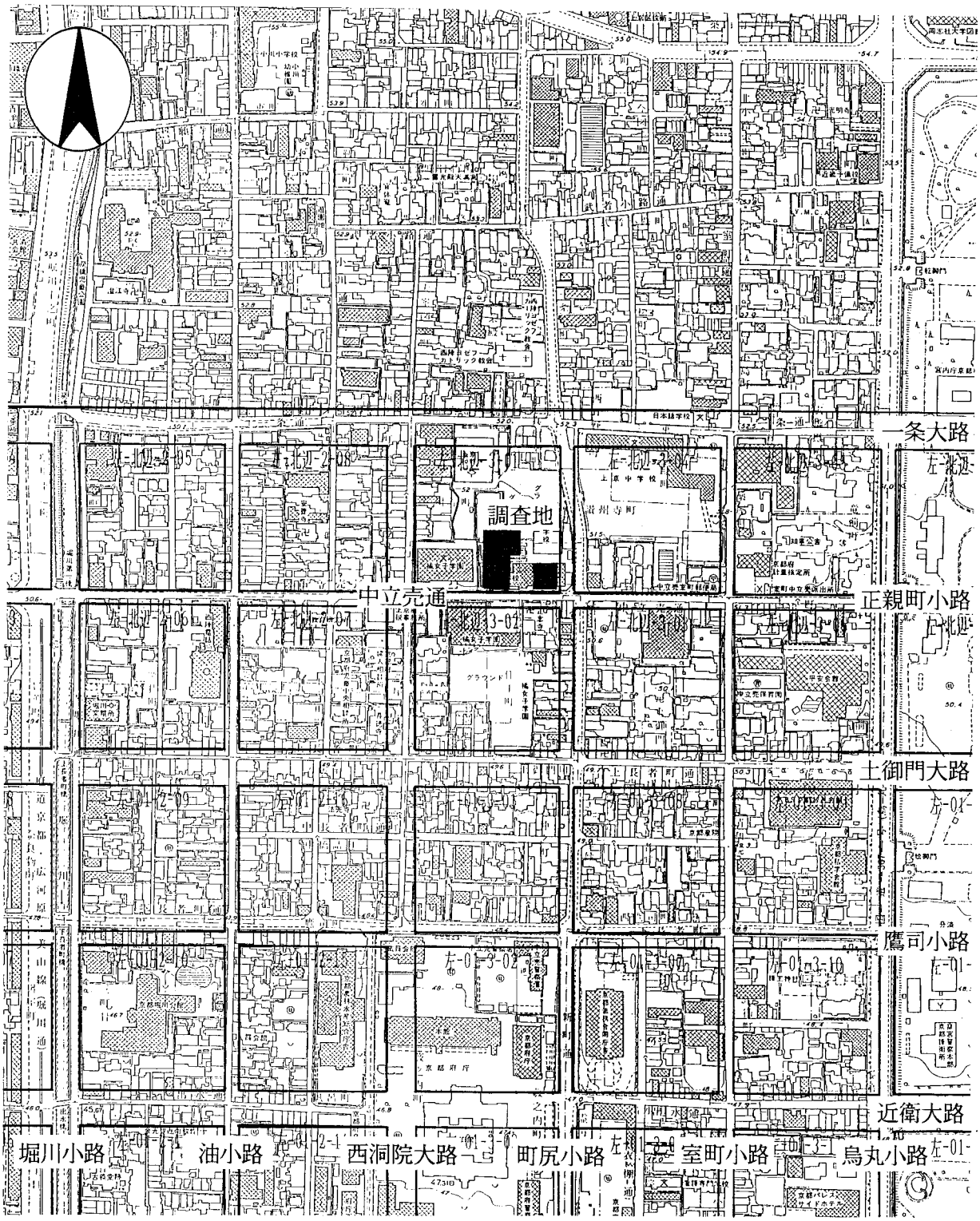
室町時代から桃山時代の堀は４条確認しています。最も大きい堀は調査区中央部を南北にほぼ縦断し東へ直角に曲がっています。この堀のすぐ西側にも並行する２条の南北方向の堀があります。いずれも幅約３ｍ、約１ｍもある大きな堀です。堀の埋土や周辺からは金箔瓦が多量に出土しました。金箔瓦の種類は豊富で、中には建物の棟を飾った金箔鯱瓦や家紋を飾った金箔瓦も含まれています。こうした状況から、桃山時代にはこの地に豊臣秀吉配下の武将の屋敷があったことがほぼ確実となりました。ただし、残念ながらここに屋敷を構えた人物の名前を明らかにすることはできていません。

また、室町時代以前にもたくさんの建物があったことが判明しており、調査区北側中央部の大きな穴の埋土の上層からは、12世紀後半から13世紀前半に中国でつくられた白磁四耳壺が完全な形で出土しています。

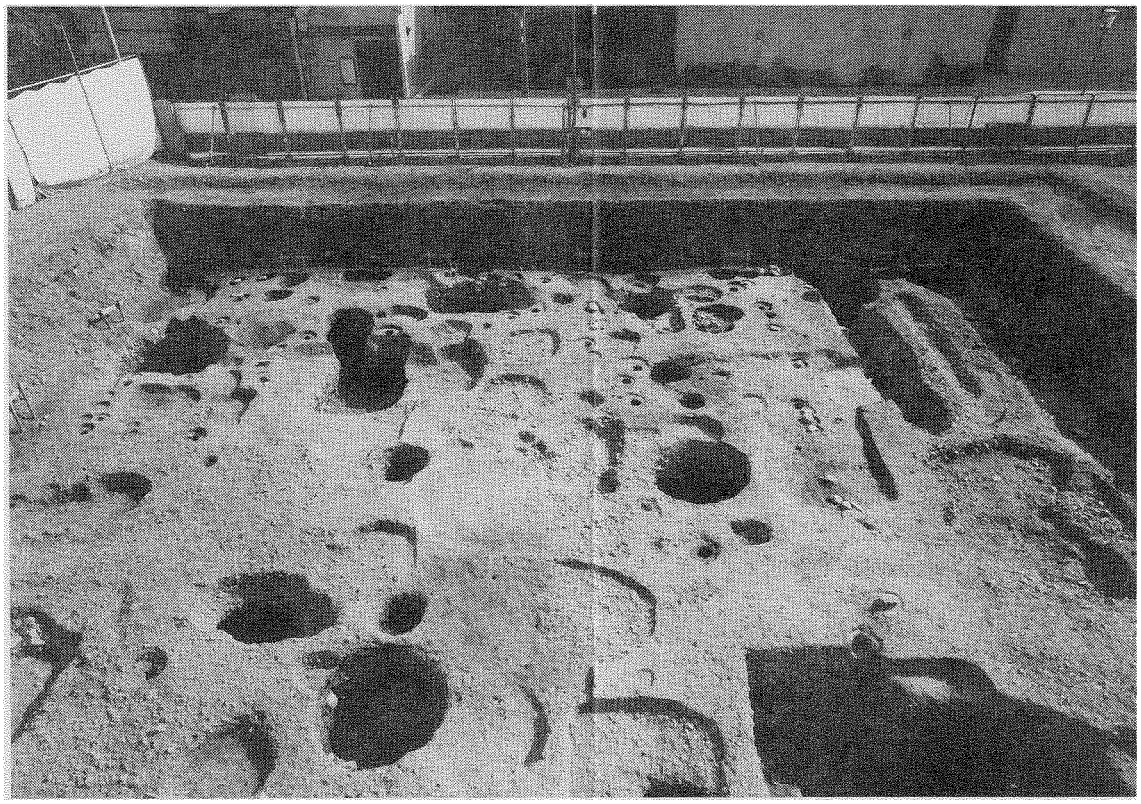
４．まとめ

今回の調査では、当初の予想通り、平安時代から江戸時代にいたる、数多くの遺構を発見し、同時に多量の遺物を採集することができました。中でも室町時代以降の成果からは、現在と同様、多くの建物が建ち並んでいた景観を復原することができるでしょう。その中には桃山時代の武家屋敷、江戸時代の大きな商家もありました。

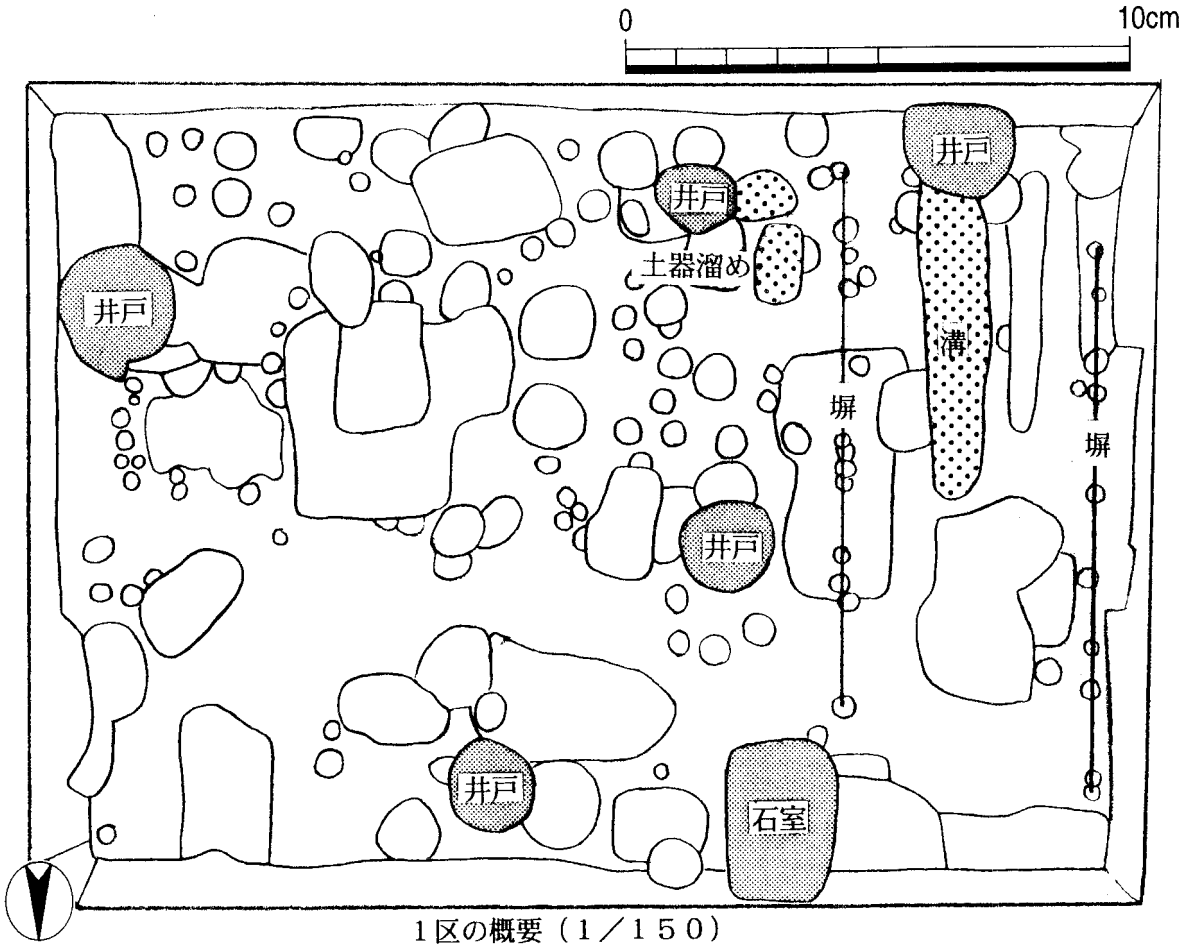
調査地は、一条大路に面した平安京の北端に立地していますが、当時は周辺に役所の施設や貴族の屋敷が営まれた一等地であったことが記録から分かっています。そして、平安時代後期以降、これらの施設や屋敷を中核として、調査地周辺の地域は市街地として発展し、「上京」と呼ばれるまとまりを形成していきました。そこには武家や公家の屋敷、寺院や神社とともに町屋が建ち並んでおり、その様子は『洛中洛外図屏風』などに描かれています。上京の中心部は、北は鞍馬口通、東は烏丸通、西は大宮通あたりまで拡がっていたと考えられ、今回の調査地はその南端に位置しています。今後、周辺の調査がさらに進めば、平安京と同様、中世の上京の実態についても考古学的に明らかにしていくことができるでしょう。



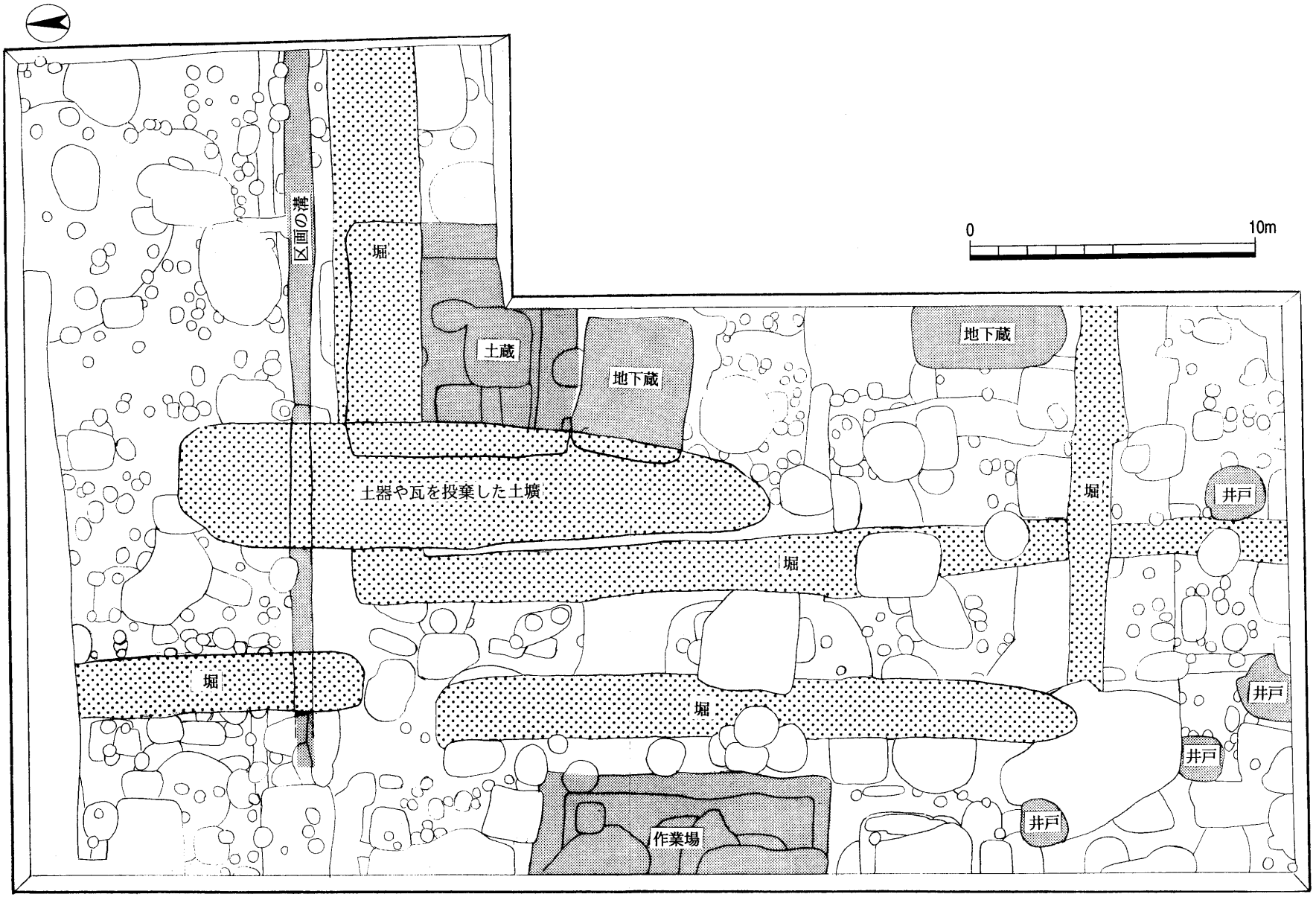
調査地の位置（１／５０００）



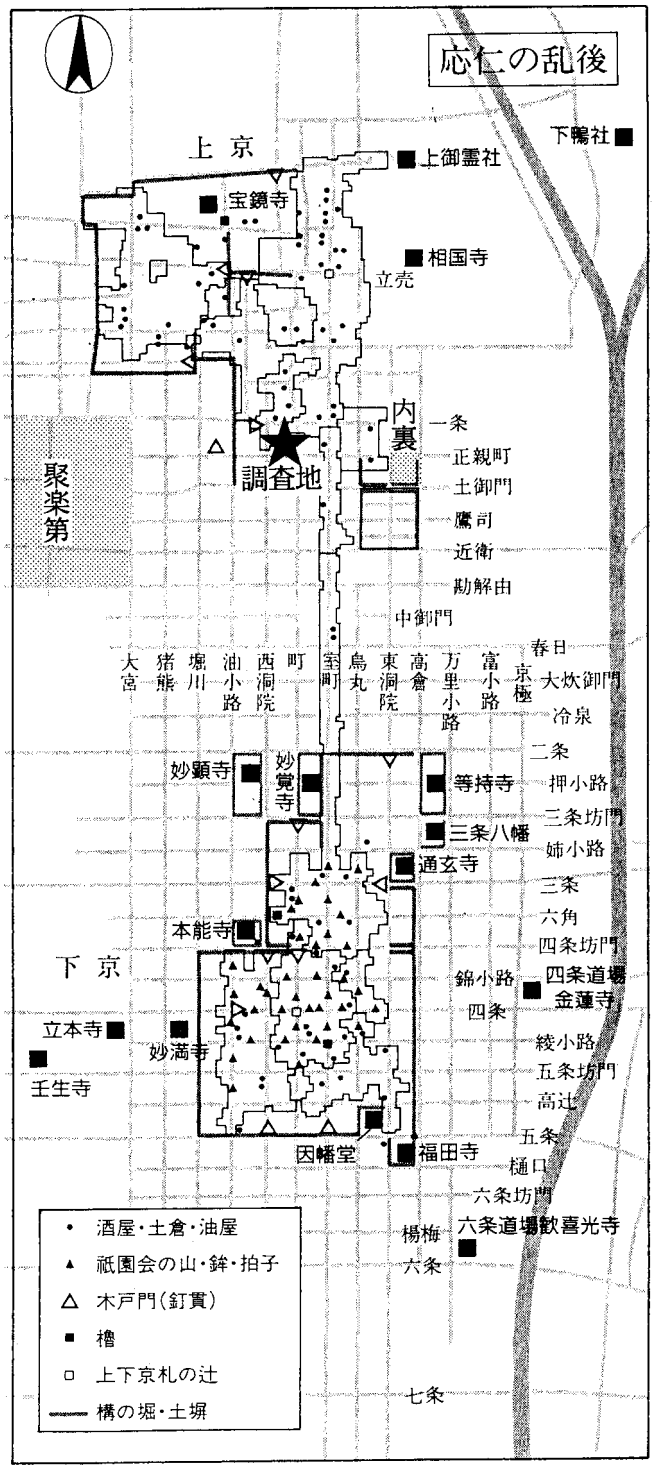
１区全景（室町時代　北から）



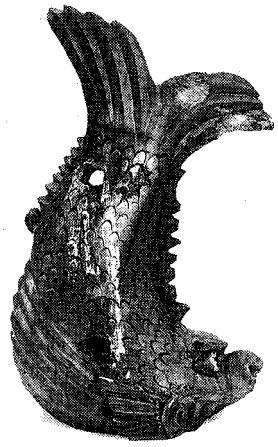
１区の概要（１／１５０）



２区の概要（１／１５０）



京都市街復原図　　高橋康夫『洛中洛外』より

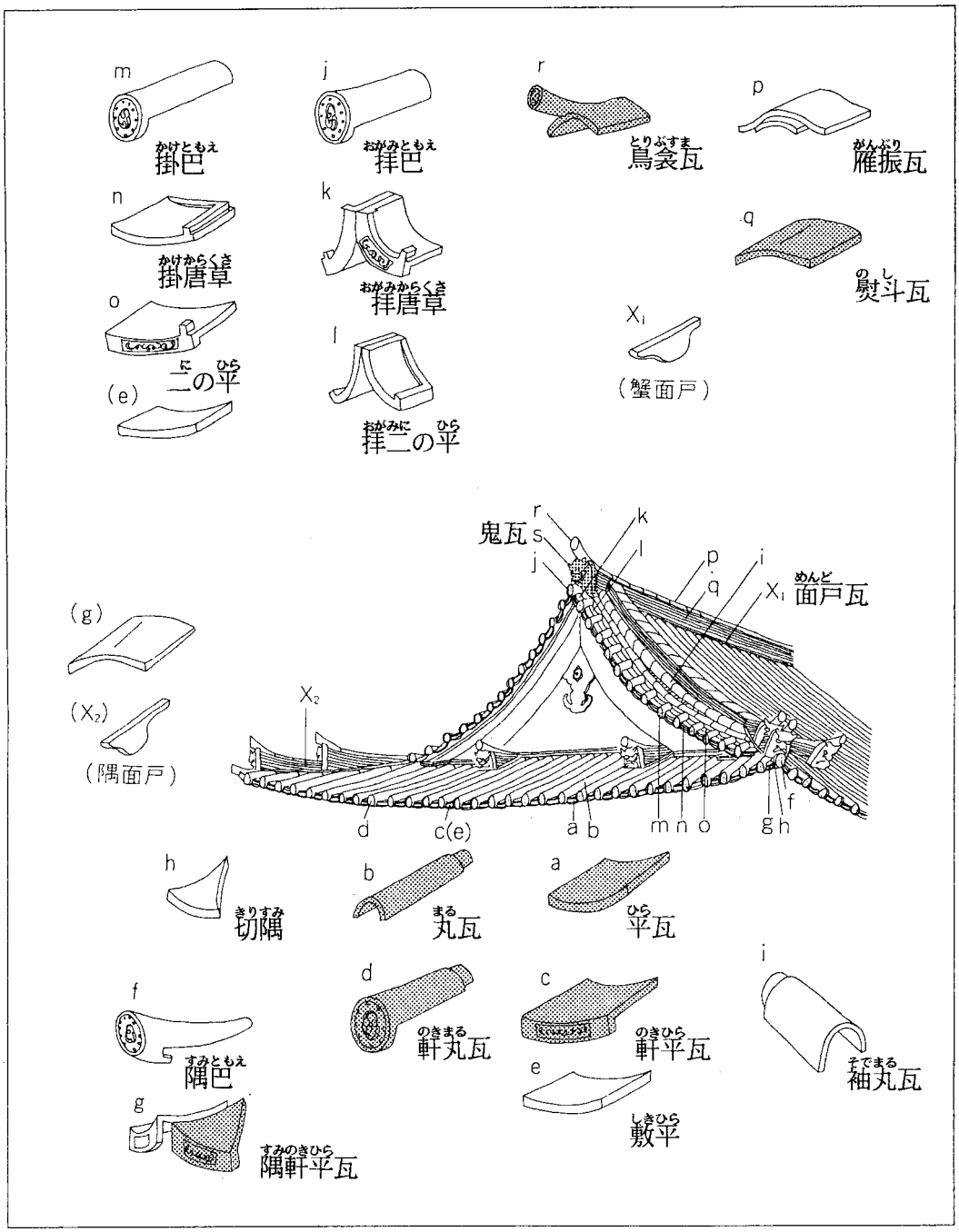


二条城の北大手門に使用されていた鯱瓦

中世の京都の町は、平安京の枠組を残しながらも政治的な都市として、また、商工業の中心地として発展していきます。調査地もそうした市街地の中に組み込まれていました。

応仁の乱で京都の町は、一旦、焼けてしまいますが、乱後も上京(かみぎょう)と下京(しもぎょう)の二つのまとまりを形成して、以前にもまして発展していきます。調査地はこの頃の上京の南端に位置しており、周辺には公家や武将の屋敷もありました。

桃山時代になると豊臣秀吉が新しい都市計画のもと、京都の市街地を改造します。調査地南側の中立売通(なかたちうりどおり)は天皇が居住する内裏と秀吉の居城である聚楽第(じゅらくだい)を結ぶ重要な道でした。



瓦の種類　藤原勉・渡辺宏『物語ものの建築史　和瓦のはなし』より

▒は今回の調査で出土した瓦。鯱瓦は大棟のはしを飾っていた。